懊悩の戒

容喙太夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
懊悩の戒

【Ｎコード】
Ｎ５５６０Ｗ

【作者名】
容喙太夫

【あらすじ】
現代に住まう妖怪は、人に触れる義務がある。人と人との間柄、嫉妬や欲望、恋慕や憎悪、様々な人の想いが渦巻く。苦しむ人々が抱える悩み、心の闇から導くために妖怪は奔走し、真実を知る。

プロローグ

古谷霧一と北山一夫は、居酒屋のカウンター席に腰掛けて、酒を酌み交わしていた。

一夫は薄くなった白髪を弱ったように撫でかたがた、黒髪の、未だ青年のような霧一を羨望の眼差しで捉えた。

居酒屋には爺臭い常連ばかりである。一見して眉目秀麗でありながら、錆色の着物に羽織を粋に引っ掛けて、猪口でぐいと飲む姿は爺そのものであった。しかし、その様子は最後に見たのと寸分の違いがない。一夫は、より自分の老いを悔いた。

「しかし、働き盛りッてのはいつまでも若々しいもんだねェ」霧一が一夫に酌をしながら言った。

「いやあ、体のあっちこっちにガタが来てる。昔ならもう死んでる年齢だ」一夫は笑った。

そうかいそうかい、と霧一も笑って、つまみを口に運んだ。

「最近会ったのはいつだったかね。つい先日のことのようで分からん」

「もう四十年は経つだろう。よく、この顔が分かったものだ」

「ああ」霧一は閃いたように天井を見上げ、こちらを見た。「あの頃に比べりゃ、そらァ歳を取ったろう。だが、人の面影はそう消えないもんだ。歳食った分きりりとしたって、見逃しゃしねえ」

「そうだったか。しかし、霧さんは本当に全く変わらねえもんだからたまげたよ。心底羨ましい」一夫はもう一度自分と霧一を見比べる。嘆息ばかり肺に詰め込むのであった。

「まあ……歳を取るッてのは、そんなに憎むべきことじゃねえ。その面に増えたシミと、シワの分だけ年の功が刻まれるもんじゃねえのかな。無礼な物言いだがね」霧一は目を細めながら言う。

一夫は俯いた。

「それに比べてね、俺らの年取りッてのは単なる亀甲の年輪なのさ。

一身に歳月を経たお前さんにできることは、俺らよりいくらでもある。その為の思慮分別だ。長年培ってきたろう？」
一夫は面を上げて、霧一を見据えた。彼の目は一夫に向いてはいなかった。
「分かっていたのか」一夫がかすれた声で言った。冷や汗が額から目元まで垂れた。
「何のことだか」わざとらしく眉毛を釣り上げると、霧一は猪口の残りを飲み干した。
今日はとても楽しかった――霧一はぽつりと呟いて席を立った。何時の間にか代金は台に置いてあった。
「懐かしい話が出来て、お陰さんでやる気が出たよ。近々また見えるだろうから、そんときは宜しく頼むぜ」
男――霧一は確かに和夫を睨んでいた。

一

三月頭。日はすっかり落ちて、月が遠慮がちにきらめいている頃である。この町の中学生である北山孝太郎は、電灯の少ない夜道を歩いていた。

三月とはいえ、未だ肌を刺すような寒さである。孝太郎は身震いした。

だが、彼にとっては寒さなど心底どうでもよいことであった。歯がガチガチと鳴ろうとも、総身に鳥肌が立とうとも、今は関係い。寧ろ、ひと月ぶりに高鳴る心臓のおかげで体が熱いくらいだった。

暗い道の先に、一つ柔らかい光が見える。

電話ボックスだった。彼は更に脈打つ胸を押さえながら、扉を開ける。そして、受話器を上げるとテレフォンカードを入れた。長らく聴けなかった声を聴けるのは嬉しいことだが、これから話される内容を考えると手から汗が出た。

ポケットの携帯電話を見ると、時刻はもう二時を回っている。彼は決心をして一気に電話番号を回した。

「……もしもし」

「こうくん、久しぶり」耳に聴こえるのは、感情を抑えた女の声であった。

彼女の様子が明らかに違う。孝太郎はそう感じた。それがどうしてなのか、彼には大体予想がついた。

「私、やっとそっちに引っ越せるよ」

「そっか」

「おばさんがね、春休み中に越せるように手配してくれたんだ」

「おばさんには感謝し尽くせないね……俺、早く君に会いたい」

「だけど、孝太郎くん学校に長く行ってないでしょ。面と向かって私と喋るの、怖いんじゃない？」

「電話で気軽に話せる君なら大丈夫……それよりもずっと会いたか

ったんだ。何年も、何年も、手紙や電話でこそこそ連絡を取るだけで、寂しかった。本当に会ってしまえば緊張はするかもしれないけど、怖いことなんてない。やっと会えると思うと、泣いてしまいそうだ」

「うん。私もずっと会いたかった。時々こうくんの声を聞くだけで癒されて、嫌なこと忘れて、一人ぼっちで頑張れたんだよ。街に着いたらまっ先に昔遊んだ公園に行くから……こうくんのこと、今まで一人ぼっちにしててごめんね……」

彼女は喜びのあまり気が張り詰めていたようだ。ようやくはっきりとした感情が声から読み取れた。電話越しに女の泣きじゃくる声が聞こえる。

――彼女はやはり、昔と何ら変わらない。孝太郎はそう思った。

自分が学校に通っていないために一人ぼっちであることを、彼女は何も悪くないのに気にしてくれている。彼女の寂しさだって、孝太郎の器量では計り知れない。今まで、電話で気丈に振る舞う彼女の近況を聞いて、抱きしめてやりたくなる衝動に何度も駆られたことだ。

孝太郎は彼女の優しい面をたくさん知っている。小学生の頃から聡明な彼女は、孝太郎の姉のようでもあった。年は変わらないのにいつも手を引いてくれる。でも、影で泣くことは絶対ない、といった強靭な心の持ち主でもないのだ。

彼女の姿を直接、もう五年ほど見ていない。顔写真はたまに手紙に付属して送られてくるが、彼女の笑顔はいつも引きつっていて、孝太郎は悲痛な気持ちを覚えた。

彼女の泣く声がようやく落ち着いた頃、「やっぱり、あいつを殺したいのか」孝太郎は消え入りそうな声で彼女に告げる。

「殺す。絶対に殺す」予想していた通りの言葉であった。以前から聞いている。

「……そっか」

「あの男のせいで、あの男のせいで。今まで私たちがどんな思いを

してきたと思ってんの。私とこうくんとを引き裂いて、こうくんを学校に行けなくして、自分は何も奪われないなんて許せない……やっとその街に戻れる。こうくんに会った次はあいつを殺すってずっと決めてる」彼女は断固として言い放った。

孝太郎はこの、如何ともしがたい彼女の気持ちを、どう受け止めるべきか悩んでいた。彼自身、彼女の憎む人を憎んでいるから気持ちは痛いほど分かるのだ。

だが憎んだ相手を殺さんとする憎悪に燃える彼女の声は、端的に言って醜いのだ。孝太郎の知る彼女は美しい。だが、今向こうにいる彼女の顔は確実に歪んでいる。それがとても悲しい。

彼女の思いは本気だ。あいつにぶつける憎悪は孝太郎のためのものに違いない。自分の為に黒く濁りきった感情を抱いて欲しくない。そして、どうか彼女には手を汚すような真似をしてもらいたくない。孝太郎はそう思っていた

――もしその気持ちが俺のためなら。

「……え？」

「何もない……また来週連絡するよ」孝太郎は話を続けずに受話器を下ろした。続きを述べる勇気は彼になかった。

彼女のためにどうか強い男になりたい。ずっと学校に行っていない自分が情けない。自分の為に殺意を抱いてくれている彼女の決意を変えるには、自分が変わるしかない。

だが自分を変える決意なんてそうそうできない。

孝太郎は、彼女の決意の強さに恐れいった。

どうか、情けない自分のために人を殺す妄執に駆られた彼女を救える、立派な人間になりたかったのだ。

「暖かくなったし、早く霧一さんと見に行きたいな。ほら、桜綺麗だよ」古谷凛は、隣を歩く夫の霧一に期待の眼差しを向けて言った。

「おいおい、学校の中じゃあ霧一さんたぁ呼ばないでくれよ。お前

さんは昼間だけ、古川凛、なんだからな」霧一は呆れたような口をきいた。
「だって」と凛はむくれてみせた。「学校の外でくらい名前で呼んだっていいじゃないか。仮にも夫婦なのに私の名前ちょっと変えられてるしさー。夫婦にゃ見えないって。しかも、今は生徒に見られることはないんだから」
ううむ、と霧一は顎を撫でながら考える素振りを見せた。
仕事上、凛と夫婦であることが露見すると非常に厄介である。向かう場所が場所だけに、周りにに既婚者はいないだろう。そのため妻には偽名を使ってもらわなくてはならない。
だが、同じ場所で働くにせよ、名前を偽って生活をするのだ。夫婦だからと言って彼女の気持ちが手に取るように分かることはない。寧ろ分からないことだらけだ。しからば、分からないなりに夫婦共通の姓を偽ることに、さぞ心さびしい思いを抱いていると仮定して、現状のわだかまりを最大限解くべきである。これは彼女をフォロウせねばならぬ、と霧一は思った。
「――いいや、意識改革てェのは必要だな。普段から心持ちと行いは意識して慣れておかねぇと、付け焼刃ではこぼれちまうもんなのさ」
そう言って霧一は懐から取り出したキセルを噛んだ。
「あー！　アンタだって意識改革なんて大仰なことを言って、全くできてないじゃないか。学校の中でキセル噴かしでもしたら、下手をするとお縄になるよ」
キセルを指さして怒る凛の声も気にしないように、彼はにこと笑う。
煙を吸っている方が落ち着いて立ち回れるのさ、と霧一はきざっぽく言った。現実にキセルを噴かすことはないであろう、きっと。
「確かにちッこいお前さんなら夫婦や恋仲というより、俺の子供のように見えるかもしれねェ。心配ねえや」
霧一は上背があって六尺を超えている。比べて凛の背丈は五尺に

すら満たないので非常に小さいのだ。途端に凛の満面が桜のように真っ赤になった。
「女ならこの位の背丈、昔はざらにいたじゃないか！」
「だが、今の女の子はなかなかどっこいでっけえぞ。お前もよく知るところだろう」
「分かってるよ！　もう、アンタなんか嫌いだよっ！」凛はすっかり臍を曲げて、小さい歩幅で大変そうに霧一の先を行った。
結構な年だというのに、凛はいつまでも若々しい。言葉遣いさえ今風ならそこらの学生となんら変わらないのに。しかしそれは霧一とて同じである。
怒っているときに褒めてやれば、当面の彼女の不安を取り除けよう。霧一は一声掛けることにした。
「なあに、ちッとからかってみただけさ。今の子に劣らねぇ、その元気なら心配いらねェなあ」
彼の思ったとおり凛が振り向いた。ここで笑顔を向けてやれば幾分ましだろうか、と霧一は思った。からかいが行き過ぎたかもしれない。
「見慣れねぇセラ服もよく似あってら。花見なら散りきらない内に連れてってやるよ。その日までは肩肘張らず、気楽に仕事しようや」
彼はそう言うと、さっさと凛の前に行った。
凛は我知らず崩れた相好を整えると、わざとらしくため息を吐いた。花唇が同じ桜色をした彼女の頬を撫でているのを、霧一はキセルをしまいながら横目に見逃さなかった。
これでお互い緊張が解れたと霧一は安心した。己にも妻にも、胸につかえがあっては満足に働けない。
そろそろ大きな建物が間近に見える。気苦労の多い仕事だが取り組まねばならない。
一刻ほど彼女とはお別れである。霧一は目の前の敷地に、堂々と足を踏み入れた。

二

門扉は松で飾られている。脇には入学式と書された立て看板があった。

建物は、立派な構えの学校であった。沢山の学生が通っているようだ。敷地は広かったが、かなりの面積を駐輪場や駐車場として使われている。既にバイクや自転車がいくらか停めてあった。

「今の子は大変だ。ぞろぞろ学舎に通ってんだなァ」霧一はノスタルジに駆られた。

時代が下って、誰もが学ぶようになった。子供から学問を奪ってまで畑で鍬を持たせるのは流行らないし、性差で何か教えを乞うことを縛る者はない。

今の子たちは読み書き算盤どころに留まらず、難しい数式を使ったり、奇々怪々たる化学の授業も当たり前に受けたりしているのだから、凄まじい変わりようである。

少なくとも霧一の頃はさほど難しいことを求められなかった。富貴で位が高く、なおかつ向上心溢れる者だけがより学識を高めるために師を仰ぐ程であった。だから、誰でも彼でも自由に勉学に勤しめることもなかったのである。

古い人間は、今の人間と違う形で余裕がなかった。紙や墨や筆を買うにせよ、高価だし、家に帰ると畑仕事に幼い兄弟の世話、と繁忙極まっていた。遠い昔の話のようだが、なかなか最近までずっとこの調子であったのだ。現にそういう時代があったからこそ、苦学して大成した人を蛍雪の功として尊ぶ。

時に今の子供達は、大日本国が日本国になる頃から、あたらしい憲法によって学びが自由として保証されているのである。誰でも学べる――これは喜ばしいことである。喜ばしいことであるが。どうも、教育というものの相対的な価値を下げたのではなかろうか、と霧一は思う。

そも、社会の構造がちと変わったくらいで値打ちの下がるものであるのなら、それまでであろう。だが、教育が人を育てるのに現状最も適しているのは事実で、霧一はそれに変わるシスティムを考えつかない。しかるに、現代における教育が極致でないこともまた事実である。霧一はこれが残念極まりないのだ。

登校拒否や引きこもり、いじめや倫理観の欠如にあれこれ、せっかく仕組みや社会の体制が整ったというのに、端から見たらば肝心かなめを教わってないように取れるのだ。これが教育の価値が下がったと主張する所以である。今回の彼の仕事はちょうど引きこもりの事案であった。特殊な例であるが、その子供を観察するがてら、実際の教育現場に身を置いてみるのも一考だ。

羨ましいんだか、憎たらしいんだか。労しいんだか。えも言われぬ思いに、霧一はキセルを噛みたくなった。しかし遠くに聞こえるブラスバンドの音が引き止めてくれた。仕事を忘れるところであった。

――北山孝太郎。十五歳。

――北山？

――小学五年生のときから自室に引きこもり、だって。

彼のことは約一月前に知った。

知った、といっても一方的にである。北山孝太郎は霧一と何ら面識がない。大したものだ、と霧一は勝手に思っていた。

霧一らが孝太郎についてもとより知っていたのは、彼の人となりくらいだったから、彼のことをなぞる程度調べた。中学時代はちらと登校したことがあっても、厳しい内容の進路相談ばかりだったらしい。授業を受けなくては着いて行けない上、出席日数が少ないと進級できなかったり、それだけで落第する確率が高くなるからだ。

しかし孝太郎は、高校入試を通過した。

引きこもりながらも独学していたようだ。何かしら、やる気はあったようである。引きこもる少年そのものに悪い感情はない。学校に行く権利を放棄するのは如何かと思うが、そんなことはどうでも

よい。この際引きこもりながらも、現状を打破しようとする動きが見られただけで十分である。しかし、いささか不可解なのはそこで、登校をやめて引きこもるような少年が、果たして自室で勉強するやる気が芽生えるのかどうか、霧一には分からないのだ。

いわゆる不登校、という問題が簡単に片付けられることでないのはよく知っている。だが、孝太郎は学校に行くのが馬鹿らしくなるほど秀才だということはない。人間関係に悩んだり、病気したりしてる訳でもない。よって一般論において、孝太郎は何となく休んでいるパタンと考えられる。

何か信念があったのか。学校に行けなくとも、彼を支える原動力があったのか。探りたいことが山ほどあるが、彼に直接聞いたり、家に忍び込んで調べることはもうできない。当面の悩みを自力で乗り越えた人間に、深入りすることはできないのだ。霧一は酷くもどかしさを感じた。

分からないことばかりであるが、孝太郎が引きこもりを超克できた方法論を手に入れることができれば、今後似た境遇の子たちに当て嵌めることができるかもしれない。そのためには長期戦を覚悟せねばならぬか。

霧一はしいんとした校舎内をじっくり調べると、一年のとある教室に入った。存外時間がかかったので仕事が終わったのか、凛が既に前列に座っていた。他には誰もいないので、随分退屈そうである。

霧一は凛と離れた後列に座って、古川さんよ、と声を掛けた。

「あら霧一さん、いらっしゃったんですか。詰め襟学生服、よくお似合いですよ」

「うるせぇわい。褒めるのはお前のセラ服だけでいいのさ。特に霧一さんたァ呼ぶんじゃぁねーよ」

「さっき手玉に取られたみたいで癪だっただけよ。お陰様で生徒や先生が偶に通る中でも楽に仕事できたよ。緊張はしたけど」凛はずうっと正面の黒板を見ているだけで、霧一の方は見なかった。

「あいた、気配りに気付いたァなら黙って受け止めて欲しかったな

ァ――それで、書類の程は漁れたかい。職員室と事務室の」
やっと霧一の方を振り向くと、A四判の束をひらひらさせた。
「霧一さんの方は？」
「他の生徒らが、でっけぇ体育館で話を聞いてるのを確認したくらいさ。ほかの学年は殆どいねぇ」
どれ、見せてくれと言って凛の席へ行くと、いくらか書類を渡された。文字が非常に細かくて見えにくい。遠目にしてやっとピントが合った。
「複製してきたのか」
「その場で刷ってきたよ」
入学式で受け付けを済ませた生徒の名簿であった。霧一は今いるクラス番号の頁を見て、北山孝太郎の名前を探すと程なくして見つかった。
「やはり今年から登校するみてぇだな」
「北山くんの玄関張っとけば、登校したかどうかは分かるんだけどねー。ホント、何があったんだろう」
「悩みの兆候が無い分にゃ張り込みはできねぇさ。早いこと真相が分かるといいな、桜が散らねェ内に」
でもあなた、梅の方が好きなんでしょ。
いや、桜も好きさ。桜を逃したら来年の梅を見ようか。
霧一と凛が閑談に興じている内に、チャイムが鳴った。入学式が終わったようである。新しい生活の、始まりの合図でもあった。

三

高校の入学式となると、意の外に父兄がいないものだ。

霧一は、息子がもし今入学式を迎えるのであれば、と考えた。体育館でキヤメラを焚くことはないにせよ、お邪魔して茶化すくらいするだろうなァと思った。それにつけても我ながら親の自覚が足りないこと。息子といくらか離れて暮らしていると、親子関係を忘れるどころか、まるで独り身であるかのような錯覚がままある。凛と同居しているから後者は救いがあるにせよ、これはよくない兆候だ。できれば呆けたくないと思う。

チャイムが鳴ったから、凛と暫しの談話を打ち切ると、程なくして体育館から生徒が教室に連れられた。父兄は廊下で教室の窓から我が子を心配げに見守っている。このクラスの担任と思しき教師が座席表を黒板に貼ると、生徒はそれを見て、各々席に着いた。一足早く教室にいる霧一と凛に、不思議に思って誰かが声を掛けることはなかった。教師が全員席に着いたことを確認すると、なにやら資料を取り出して話し始めた。シラバスとかいう奴か。

――来た。

霧一にとって数週間ぶりの、北山孝太郎の姿があった。ちょうど霧一の列の最前列にいる。書類で彼の出席を確認したとはいえ、その姿を実際目に入れるのとは違った。今まで外に出なかったのに、節目として外に出て勉学に勤めようとする姿勢は立派だ。若者が一歩前進せんとする姿は誠に素晴らしく思う。高等学校入学にあたってか、髪の毛は整髪料で固めてある。うむ、見た目から変えようとするのはよい心がけであろう。

しかし、霧一は喜ぶべき孝太郎の姿に、違和感を覚えた。

如何せん背中が曲がっているのだ。単なる猫背ならどうでもよい。しかれどうも霧一の席から見える彼の後ろ姿は怯えているようなのだ――真夜中放り出された子供が膝を抱えているような。

――これはもしかすると、一時の脱却に留まるのかね。

霧一は危惧した。自身の固定的な視点をずらすべきであった。常より己を客観視できるよう心がけているつもりであるのだが、何かしら期待が高まると、盲目になってしまう。悪い癖だ。

孝太郎のことを、学び舎に通わずとも独学できるような、強い心構えがある少年であると勝手に思っていたのだ。引きこもりの青少年は今まで何人も会ったことがある。その青少年らの殆どは自分を変えたいと思っていても、行動に移せない子が多いことを知った。ちょっとしたこちらのお膳立てでやる気に満ち溢れる、なんてことはなかった。子供たちそれぞれが抱える悩みを辿って、断ち切らせて、やっとこさ保健室登校できるか否か、というレヴェルである。それだけ、超克は困難であるのだ。

これは失敗であったか。

恐怖感というのは、根を深く張る。知らぬ間に心を蝕んで、人の動きを阻害するようである。更には一月、二月と時が流れるにつれて、一体何が根を張っているのかさえ分からなくなるから厄介だ。

それを全くもって忘れていた。彼とて他の少年と同じ、人間ではないか。強い心があったとしても、弱い一面があっておかしくないのだ。

未だ十五の少年に引きこもりの脱却は酷であったか。いや、そんなことはないだろう。

十五の少年とて何かを決める権利がある。大人が、部屋をこじ開けて引っ張り出せば引きこもりはそれで終わるかもしれないが、心に深い遺恨を取り除かないままにすることを霧一は好ましくないと思っている。

綺麗なことを言いたい訳ではないのだ。単純に、精神的な問題は精神的な解決策を用いるべきだと考えているのだ。この場合の引きこもりは、まず精神的になんらかの苦痛があって引きこもっているわけだから、まずはその苦痛を取り除かせることが重要なのだ。しかし、それが非常に難儀であることを忘れていた。

それはともかく、北山孝太郎が自分自身の意思で悩みを乗り越えた、もしくは乗り越えようと努力を進行しているのなら、それを応援したい。いや、応援するのが仕事である。霧一の下心は、孝太郎が悩みを乗り越えられた心持ちや、方法を学び取りたいのだが、大体、彼のあの背中の寂しさといったら、まだ悩みを乗り越えきってない、と霧一の勘が告げるし、ここは一時見守る形で彼に接近して、超克のメソッドは期待しない程度に待つのがよいだろうか。

目先の利益に囚われて見失っていた。北山孝太郎とて若い少年なのだ。仮に強い信念を持っているにせよ、元は懊悩して引きこもっていたのではないか。背中から察するに、何かまだ彼の不安を煽るものがある公算が高いのだ。

彼がこのまま学校に通えるようになれば、それでいい。それでいいのだが、まだ我々がすべきことがある。彼が通えるようになっても、何か根を張った遺恨――わだかまりがあるのなら、そのわだかまりを探しだす必要がある。

あの、心寂しい背中を作る元凶を、当面探さねばならない。

――なんと肝要なことを忘れているのだ吾は。何が呆けたくないだ。とうの昔に呆けているではないか。

いいや、そう後ろ向きになるのはやめにしよう。

まずは呆けているではないと仮定しよう。これは世代間のズレなのかもしれない。若者の心持ちと、この霧一自身の心持ちが数間離れているのかもしれない。外面が歳を取らぬからとたかをくくっていたか。なんたる嘆かわしきことか、頭は爺そのものではないか。若者の立場になって思考を深めるべきだ。はて、若者の心持ちを知るに手っ取り早い方法は一体何であるか、これも別に思考せねばならないか――

「大丈夫？」

霧一が俯きがちに唸っていると、誰か男が声を掛けた。霧一は面を上げると、思わず呆気に取られてしまった。

目下一番に声を掛けるべきであった孝太郎自身であった。先の寂

しげな背中はどこへやら、にこと笑みを浮かべているのだ。
「あー……心配してくれたか、ありがとう。何ともない」
霧一は腰を上げてぐるっと辺りを見回すと、生徒が何人か連れ立って、廊下に出はじめていた。一つ気になる視線があったので、それを手繰り寄せてみれば案の定、凛であった。凛も横に二人ほど女子生徒を連れていた。
どうも霧一が考え込んでいる間に、担任教師の話が終わったようである。

四

「ぼーッとしてたら担任の話根こそぎ聞き逃しちまった。みんなは何をしてるんだい」
「十五分くらい自由に校舎を回って見てこい、だって。ほら、そのプリントに地図あるでしょ」
孝太郎は霧一の机上にあるプリントを指差す。なるほど、先に見ておいた凛の書類に確か地図があったが、内部を見学せよということか。
「それで、みんなそれぞれ仲間で集まってうろついてるんだ。俺、越境通学で友達いないから困ってるんだ」
「ああ、俺もツレはいねぇから。どっかからか回るか。外でるぞ」
「ありがとう」
新学期というか、新たに進学して他とギクシャクするのは今も昔も変わらないものだなァ、と霧一は思った。
あいにく霧一は、教室に集合する前に校内を全て見回ったので、暫時の校内見学は無意味なことこの上ない。だが北山孝太郎に近づけるのは助かる。今は彼の心境にできるだけ近付くのがノルマだ。どうして話しかけるかどうか、方法を模索していたのだが、まさかあちらから声を掛けてくるとは。誠嬉しい誤算である。無駄な時間は過ごしたくないのだ。
客人や教師として学校に邪魔することも考えたが、資料の入手の他は、なまじっか生徒との距離が遠い。霧一は学生服にわざわざ袖を通して接近するのは正解であったと確信した。
多目的教室だの何だの、適当に見て回っていると、「そういえば名前」と孝太郎がおもむろに言った。
「ああ。古谷霧一。霧もやの霧に数字の一、でキリイチ」
「キリイチ？　変な名前だ」
「言ってくれるじゃアねぇか。お前の名前は何だい」建前では今日

が初対面である。霧一は孝太郎の名前を尋ねた。
「北山孝太郎」孝太郎は答える。
あんれ、と霧一は首をひねった。そういえば北山孝太郎は誰かに似ている気がする。特に目鼻立ちが。
「どうした？」
「いや、お前さん誰かに似てるなァと思ってね」
にわかに、孝太郎はケラケラと笑った。
「おいおい、お前こそどうしたよ」
「だってさ、喋り方が何かうちの爺ちゃんみたいだなあと思って」
至極当然な意見である。霧一の齢は迂闊に言えないレヴェルに達しているから、言葉遣いが古臭い漬物のようになっても何ら不思議がないのだ。見た目が若いのと、小細工が得意だから彼ら本物の高等学校生と肩を並べられるが、言の葉の端々は変えようがない。慣れ親しんだ和語とは異なる概念の外来語や、新語を積極的に取り入れているつもりだが、そう上手くいかないものだ。
ここまで考えて霧一は合点がいった。そうだ、爺さんである。丁度この子の爺さんあたりの年齢に北山姓の知り合いが居た。
「孝太郎、お前どこの出だったか」
「えっ……隣町」
「そうか。とするとお前の爺さんあたりに、一夫ってのがいなかったかい」
「ああ……」と孝太郎は独り言ちた。「父さんの方に一夫爺さん、いるよ。まさか知り合い？」
「お前の爺さん、囲碁やってるだろ。打ったことがあるんだよ」
実際に古く面識があるのだが、本当にそう言うわけにはいかないので、はぐらかした。
「そっか。でもあの爺さん相当偏屈だし、よく話が合うねぇ」
「え、あいつそんなに取ッ付きにくい性質だったろうか」霧一は顎を撫でた。
「性格悪いし、腹黒いし、俺は好きじゃない」

「なるほどねえ」
孝太郎は一夫に良い印象を抱いていないようである。何故だ。霧一は何か引っかかるものを感じた。北山一夫とは四十年ほど前会って、それっきりである。
その時も孝太郎と同じように仕事の上で彼を知り得た。まだ若かった一夫は非常に泣き上戸であって、精神的に屈強であることが求められた時流では珍しく、霧一の印象に残っているのだ。
当時、彼も彼とて深刻な悩みを抱えていたから、霧一が克己することの手伝いをしたのだ。あくまで露を払う程度。孝太郎が言うようなイメイジは特になかったので正直、意外だ。時の流れに変えられてしまったのだろうか。
――あいつの孫が今度はお悩みかい。
霧一は底深い因縁を感じざるをえなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5560w/

懊悩の戒

2011年9月29日03時23分発行